

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

1. 研究課題

高度経済成長期の生活史

Life history during high economic growth period

2. 研究代表者氏名

藤原 辰史

FUJIHARA, Tatsushi

3. 研究期間

2023年4月-2026年3月(1年目)

4. 研究目的

本研究班では、「暮らしの手帖社」に所蔵されている文字史料と視覚史料を分析することで、高度経済成長期日本の生活や文化について考えていきたい。近世以来続いていた暮らしのあり方は、急激な都市化とモータリゼーション、テレビの登場、さらには石油産業の発達でダイナミックに変化した。暮らしの手帖社には、台所、トイレ、お茶の間など、高度経済成長期の人々の暮らしがわかる写真や原稿が多数存在している。また、全国から集めた戦争の記録も多数残存しており、それらは経済成長期にどのように戦争体験が受け継がれ、あるいは、忘却されていくかについての貴重な史料とも言える。これらはすべて、雑誌『暮らしの手帖』を率いた花森安治やスタッフが取材したものである。これらの史料の整理にあたった暮らしの手帖社のスタッフにも加わってもらい、研究会を進めていきたい。

'In this joint research group, we consider life and culture in Japan during the country's period of high economic growth by analyzing written and visual historical materials in the collection of the publishing company Kurashi no Techo Co. Ltd. The way of life that emerged from the early modern period changed dynamically with rapid urbanization and motorization, the advent of television, and the development of the oil industry. Kurashi no Techo Co. Ltd. has many photographs and manuscripts that show how Japanese people lived during this period, including materials on kitchens, toilets, and living rooms. Furthermore, there are many war records collected by the staff of the publishing company, which are valuable historical sources on how the experience of war was passed on or forgotten during the period of high economic growth.

5. 本年度の研究実施状況

2023 年度は、『暮らしの手帖』という雑誌のなかで、いったいなにが研究の問題となるのかについての予備的発表とさらに、暮らしの手帖社で史料に実際に目を通し、調査することで、この会社が担っていたさまざまな側面について知見を得た。とりわけ、高度経済成長期の商品テストやレシピ、編集長の花森安治の戦争体験などについて、重要な知識を得ることができた。また、花森安治のご家族や、編集部だった方の聞き取りをし、同時代の証言を班員のみならず暮らしの手帖者社員と共有することができた。

6. 本年度の研究実施内容

- 2023-05-15 暮らしの手帖社の資料紹介 発表者 難波達巳 暮らしの手帖社 発表者 会田綾子
暮らしの手帖社
- 2023-06-12 高度経済成長期についてのレクチャー 発表者 小堀聡
- 2023-07-10 研究班の今後の運営について 発表者 藤原辰史
- 2023-09-03-09-05 暮らしの手帖社での調査 発表者 参加者全員
- 2023-10-16 OB の河津一哉さんの聞き取り 発表者 河津一哉 暮らしの手帖社元社員
- 2023-11-13 『花森安治の従軍手帖』における短歌作品と昭和歌壇の戦中・戦後 発表者 菅原百合絵
- 2023-12-04 『暮らしの手帖』と高度経済成長期の生活技術 発表者 瀬戸口明久
- 2024-01-05 雪野まり『暮らしの手帖』における自立的ジャーナリズムの形成を読む 発表者 西川和樹 同志社大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

藤原辰史、岩城卓二、酒井朋子、石井美保、小堀聡、福家崇洋、瀬戸口明久

学外

青木聡子(東北大学文学部)、会田綾子(暮らしの手帖社)、難波達巳(暮らしの手帖社)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
人文研所属 (内女性)	1 (3)	7 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	56 (24)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
国立大学 (内女性)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
公立大学 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学 (内女性)	1 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関 (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他 ※ (内女性)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	4 (5)	10 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	80 (40)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	9		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	7		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載 論文数	掲載 年月	論文名	発表者名
1	Handbook of Environmental History in Japan	1	R5.4	Environmental Problems Caused by the Shinkansen in Nagoya City	青木総子
2	ユリイカ 2023 年 4 月	1	R5.4	牧野富太郎の山歩き——植物採集の王国	瀬戸口明久
3	Handbook of Environmental History in Japan	1	R5.4	The 20th Century around Tokyo Bay: Life, Production and Environment	小堀聡
4	地域社会はエネルギーとどう向き合ってきたのか シリーズ環境社会学講座 2	1	R5.6	「原発に抗う人びと——芦浜原発反対運動にみる住民の闘いと市民の支援」	青木総子
5	軍事史学	1	R5.6	大岸頼好と国家改造運動	福家崇洋
6	世の中を知る、考える、変えていく	1	R5.7	環境をめぐる人々の取り組みは世の中をいかに変えるのか？	青木総子
7	女性白書 2023	1	R5.8	食料危機打開の方向と農業女性	岩島史
8	経済社会とジェンダー	1	R5.8	書評 大野恵理（2022）『「外国人嫁」の国際社会学 「定住」概念を問い直す』有心堂	岩島史
9	コモンの「自治」論	1	R5.8	食と農から始まる「自治」——権藤成卿自治論の批判の先に	藤原辰史
10	高木博志編『近代京都と文化 「伝統」の再構築』	1	R5.9	戦時下の新村出	福家崇洋
11	井野瀬久美恵（責任編集）『つなぐ世界史』3 近現代/SDGs の歴史的文脈を探る	1	R5.9	概説 新世界秩序の相剋とファシズムの台頭	福家崇洋

12	思想 1194 号	1	R5.10	巨大なものとしての科学 ——一九六〇年代科学論 におけるポストヒューマ ニズム	瀬戸口明久
13	配信芸術論	1	R5.10	機械化時代の音楽・科学・ 人間——兼常清佐のピア ノの実験	瀬戸口明久
14	季刊民族学	1	R5.10	笑いの向こうにみる紛争 と分断の経験——北アイ ルランド・ベルファスト の日常経験の多面性	酒井朋子
15	上手な運動の終い方？—— オラリティと承認の多元性	1	R5.11	語り継ぐ経験の居場所—— 排除と構築のオラリティ	青木総子
16	年報 村落社会研究第59集 アクションリサーチという 問い—フィールドとの向き 合い方を考える	1	R5.11	農業経済学の研究動向	<u>岩島史</u>

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際 共著
1	Handbook of Environmental History in Japan	藤原辰史	R5.4	Amsterdam University Press / Japan Documents	
2	地域社会はエネルギーとどう 向き合ってきたのか	青木聡子	R5.6	新泉社	

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

14. 次年度の研究実施計画

2024 年度は、引き続き『暮らしの手帖』の読解を発表形式で続けていきたい。とりわけ、

暮らしの手帖の編集者の聞き取りや執筆者たちの調査を通じて、人間関係についても迫っていく。また、調査できるものだけで、暮らしの手帖社での調査も遂行予定である。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

2024年度は2025年2月に、暮らしの手帖者のアーカイブ担当者をお呼びして、市民共創プロジェクト「暮らしの手帖から学ぶもの」を開催する。